The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	バーナード・ショーの『傷心の家』における黒人女性表象 : 家母長制社会への革命
Author(s)	松本, 承子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54333
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

バーナード・ショーの『傷心の家』における黒人女性表象

――家母長制社会への革命――

松本　承子

1.　はじめに

この作品は1916年3月から創作され、1917年5月に完成する。初演を1920年11月10日にニューヨークの Garrick Theatre で迎える。バーナード・ショーには珍しく、この作品の創作には約1年間かかっている。ショーもフェイビアン協会仲間の William Archer に愉快な登場人物が誕生しているにもかかわらず、第一次世界大戦に気が取られて、この作品の創作がなかなか進まなかったことを告白している[1]。ショーが言及しているように、彼がこの作品に取り掛かっていた時期は、イギリスが動乱を迎えていた時代である。イギリスは1914年に勃発した第一次世界大戦の真っただ中にあった。更に、この時期には世界を震撼させる出来事もあった。それは大戦中に起こったロシア革命である。それと関係があるのかどうかははっきりしないが、この作品の副題はロシアとの関係性があることを示唆している。この作品の副題は、"A Fantasia in the Russian Manner on English Themes" である。Ronald Bryden は、序文でショーがチェーホフの『桜の園』に言及しているので、先行研究では『傷心の家』を『桜の園』に照らし合わせ、考察するものが多いと主張する[2]。

しかし本稿では主人公であるショトーバー船長 Captain Shotover の最初の妻であるジャマイカの黒人女性に注目したいと思う。この黒人女性がこの作品内でどのように表象されているかを考えたい。

この作品の執筆の6年前に、ショーは彼の妻とジャマイカに旅行に行っている。その時彼等は、ジャマイカの総督であるシドニー・オリバー Sydney Oliver と1週間過ごしている[3]。ショーはこの旅行からこの作品のヒントを得ているにちがいない。作品内ではジャマイカの黒人女性やイギリス植民地の総督が言及される。

---

[1] Michael Holroyd. *Bernard Shaw Volume 2 1898-1918 The pursuit of Power* (Penguin Book, 1991) p. 382.

[2] Ronald Bryden. "*The Roads to Heartbreak House*." *The Cambridge Companion to George Bernard Shaw*. Ed. Christopher Innes (Cambridge UP, 2004) p. 183.

[3] Dan H., Laurence, ed. *Bernard Shaw Collected Letters 1911-1925* (Max Reinhard, 1985) p.7.

2. ジャマイカの黒人女性

実際には、ジャマイカの黒人女性は舞台上には登場しない。彼女とショトーバー船長は２年間だけ結婚していた。その後、彼は彼女をジャマイカに残してイギリスに帰国したので、彼女の消息を知らない。しかし彼にとっては、彼女との結婚生活は良いものであった。なぜなら彼は彼の娘の友達の婚約者であるマンガン Mangan に 西インド諸島の黒人女性を嫁にすることを薦めている。マンガンは驚き、以下のように叫ぶ。

MANGAN. Well, I am damned!

CAPTAIN SHOTOVER. I thought so. I was, too, for many years. The negress redeemed me. (76)[4]

ショトーバー船長はマンガンの言葉を受け、自分がかつて地獄に落ちていた事を告白する。そのような彼を救ってくれたのが、ジャマイカの黒人女性である。彼女は神性を帯びたような神秘的な女性に描かれている。また彼女が舞台上に現れない事も相乗効果となっている。２年間という短い結婚生活にも拘わらず、ショトーバー船長はそのような女性と共に過ごしたことで多大なる影響を受けている。彼はこの時代の「イギリス人らしい」イギリス人ではない。

3. ジャマイカの黒人女性の夫と娘達への影響

ショトーバー船長はイギリス・サセックスにある旧式の船の後部のように作られた家で、長女ハシャバイ Hushabye 夫人とその夫ヘクター Hector と同居している。彼らの家は整理整頓されているとは言い難く、ものやゴミが散在している。 “Bohemian” であるショトーバー家は、当時のイギリスの一般家庭とは異なり、招待客へのおもてなし、規則的な食事とお茶、十分な睡眠はなく、当時のイギリスで「常識」とされていたものは一切存在しない。「家長」であるはずのショトーバー船長が進んで家事を切り盛りする。

時に道化のように滑稽に見え、時に正気を失っているように見えるショトーバー船長であるが、しかしそれは彼の実際の姿ではない。彼の真相を知るヘクターは義父を “extremely clever” (61)と認め、 “supernatural old man”、 “sage” と呼んでいる。ショトーバー船長は、救命ボートの特許も取得し、ラム酒の力を借り、「精神集中の第 7 段階」を習得することを試みている。ショトーバー船長の昔の船員仲間で、彼の家を強盗に入る泥棒は、“he…can…see the truth hidden in the heart of man” (121)と、船長は人の本音を見抜く能力があるという事を知っている。Stanley Weintraub は、ショトーバー船長を予知能力者であると主張する。

---

[4] Bernard Shaw. *Heartbreak House* (Penguin Books, 2000)。以下本作品からの引用はこの書からの引用である。

Shaw's sea captain is, rather, a prophetic figure who, like Hector, warns of coming calamity if civilization cannot add navigation to its skills. [5]

ショトーバー船長に予知能力があるかどうかは分からないが、彼はハシャバイ夫人の友達であるエリー Ellie の父親である理想主義のマッジーニとは違い有言実行するタイプである。彼は マンガンに "You will not marry her [Ellie]"(75)、 "She will break it [their engagement] off" (76) と言い、マンガンとエリーの婚約を解消するように導く。

ショトーバー船長には長女のハシャバイ夫人以外に、次女のアリアドニー Ariadne という娘がいる。父親同様、この姉妹もヴィクトリア朝時代に求められた「家庭の天使像」とは全く異なるタイプである。それは彼女達の家庭環境と教育にある。彼女達はショトーバー船長と家政婦のギネス Guinness によってイギリス的「常識」に捕らわれずに育てられた。彼女達は言葉を話す前から、異教徒の中年の哲学者向けの観念を教えられ、自分自身で物事を考えるように育てられたのである。

しかし一緒に育ったはずの二人姉妹の性格は全く正反対である。ハシャバイ夫人は父親に似ていて、自由奔放である。自らエリーを招待したにも拘わらず、彼女を出迎えず、昼寝ができるタイプである。彼女は家事を全くする気はない。またイギリス人にとっては必読書であるシェイクスピアのオセロに対して好意的ではなく、エリーからその本を取り、床に投げつける。 "life is so much happier than any book!" (70) と彼女は言い、読書よりも人生を享受する。

妹のアリアドニーは、幼い時から、この家の家風に対して反抗的であった。彼女は "I was unhappy, and longed all the time – oh, how I longed! – to be respectable, to be a lady, to lives as other did" (55) と説明するように、幼少時代から高い地位につくこと夢見て来た。それ故に彼女は 19 歳で、ヘイスティング・アタワード Sir Hastings Utterword と結婚して、この家を出て、総督である夫と共に植民地に赴任した。それ故に彼女がこの家に帰郷するのは 23 年ぶりである。しかし久しぶりに見るこの家の無秩序に早速、嫌気がさしている。

しかしながら二人の娘には一つの共通点がある。それは彼女達にはいかなる男性でも恋に落ちるほどの魅力があるということである。また彼女達は既婚者であるにもかかわらず、自由恋愛を楽しむ。彼女達には特殊能力が備わっている。ヘクターが "the Shotover sisters have two strange powers over men. They can make them love; and they can make them cry" (136) と認めるように、彼女達は強く、 "men's moral sense" (82) を破壊して、男性を虜にして、奴隷にするのである。ヘクターは妻の "breadwinner" ではなく "lapdog" である。ヘクターは自分の現状を "Is there any slavery on earth viler than this slavery of men to women?" (137) と嘆くにも拘わらず、自分の妻を愛さざるを得ないのである。

---

[5] Stanly Weintraub, "Shaw's Troy: *Heartbreak House* and Euripides' Trojan Women." *Shaw The Annual of Bernard Shaw Studies,* Volume 29 (Penn State UP, 2009) p. 45.

ヘクター同様に、アリアドニーも男性を虜にする。彼女と初めて会ったヘクターも、彼女に魅了される。彼女の義弟であるランダル・アタワード Randall Utterword も仕事をせず、彼女だけを追い回す。

4. ショトーバー家のエリーへの影響

このような風変わりなショトーバー家に招待されたエリーは、この家族に多大に影響される。彼女はマンガンとの婚約を解消するまでに至る。しかし彼女は最初からマンガンを愛していなかった。彼女にとっての最愛の人は彼女の父親である。"my own father is all the world to me" (56) というほど彼女は父親を愛し、"my father is the best man I have ever known" (52) と言うほど父親を尊敬している。マッジーニには実業家の資質はなく、事業を始めてもすぐに会社を倒産させる。その所為で、彼の家庭は貧しい。彼は人から嫌われるタイプではなく、寡黙な性格である。しかしその反面、彼は自由のために戦う理想主義者である。彼は "Another solider born for freedom" (60) と言いながら詩人の親の元に生を受け、現在でも "a consecrated solider of freedom" (100) である。若い頃は、マッジーニは societies に参加し、演説や小冊子を通して活動してきた。彼は "Every year I expected a revolution" (155) とあるように革命を期待してきたが、しかしそれを実現したことはなかった。

このような父に影響を受けたエリーの理想の男性は、"Graver, solider tastes" (61) である。またエリーの理想の男性は、彼女の解釈に従うと、世界を駆け巡る勇敢な冒険家であるシェイクスピアのオセロのような男性である。偶然にも彼女はこのような理想の男性に出会う。しかし後にその男性がヘクターであると知り、失恋、傷心する。

エリーはヘクターに片思いする一方で、マンガンとの婚約を解消することはなかった。なぜならエリー親子を経済的に手助けしてくれたマンガンに義理を感じているからである。マンガンは彼女の父親の幼馴染みで父親の事業の為に資金を出し、その事業が倒産した時も、会社を引き取り、その上、マッジーニを経営者として雇う。また父親の所為で貧困を強いられていたエリーは、金銭の為に "a millionaire" であるマンガンと結婚することを決意していた。エリーは結婚後も手袋がどれくらい持つかと悩みたくはないのである。彼女は "the poverty…is damming me by inches" (127) と言い貧困がどれ程魂を蝕むかを力説する。それ故に彼女は自分の魂を救うためにマンガンとの結婚を決める。

しかし実際にはマンガンは億万長者ではない。ショトーバー家では多くの真実が露呈する。マンガンの実体もその一つである。彼の工場はシンジケート（企業連合）の経営であり、彼は資本家と労働者の仲介役にすぎない。また彼はシンジケートの株主と資本家の使い走りとして政治家としても活動する。

ショトーバー家の雰囲気にもまれ、エリーも自分の女性としての強さに気付く。エリーは "I know my strength now" (149) と言い、自分の力を認識する。エリーはショトーバー家で、自分の理想の相手である Marcus Darnley が実在せず、ヘクターであり、彼の冒険

話全てが嘘であることや婚約者の真相を知り、全てを失い、傷心する。それ故に、彼女はショトーバー家の家を "Heartbreak House" と呼ぶ。しかし彼女はこの家で傷心することで、何でもできる自分の力を知るのである。

CHAPTAI SOTOVER: Heartbreak? Are you one of those who are so sufficient to themselves that they are only happy when they are stripped of everything, even of hope?

ELLIE: [...] I feel now as if there was nothing I could not do, because I want nothing. (131)

エリーは男性に身体的、金銭的に依存することなく、自分自身で全てを行うことが出来る力を認識する。しかしこの結果はショトーバーやハシャバイ夫人が待ち望んでいたものである。

5. 家母長制革命

ハシャバイ夫人は、エリーとマンガンの婚約を解消するために彼女を家に招待する。また招待されたエリーの姿を見て、ショトーバー船長は、 "Youth! Beauty! Novelty! They are badly wanted in this house "(57) と言い彼女の存在の必要性を強調する。人を見る目があるショトーバー船長は彼女の資質を見抜く。ト書きに "She is a pretty girl, slender, fair, and intelligent looking" (50) とあるようにエリーは美しく知的である。また彼女には音楽、芸術、文学という教養も備わっている。また催眠術も得意である。ショトーバー船長は彼女を "A ladylike daughter. The language and appearance of a city missionary" (80) と絶賛する。彼が彼女をこれほど待ち望んでいた理由は、彼の革命に必要な存在であるからである。

ショトーバー船長は家母長制革命を準備する。ショトーバー船長は戦争で座礁しかけているイギリスという船を「新たな境地」に導こうとする。彼は有事の際、イギリス人には "navigation" が必要であると強調する。

HECTOR: And what may my business as an Englishman be, pray?

CAPTAIN SHOTOVER: Navigation. Learn it and live; or leave it and be damned. (156)

ショトーバーは船頭として、戦争で全てを失いつつあるイギリスを新たな社会へと導こうとする。それは第一次世界大戦にレーニンが成したロシア革命のように。ショトーバー船長は動乱の最中、イギリスに革命が起るように準備を進める。それ故にエリーはショトーバー船長の革命の"Savoir" (127)として待ち望まれていたのである。

有言実行するショトーバー船長は、ロシア革命でレーニンが理解したように、「新しい社会のための新しい人間」を創造することが必要であると考える。彼は、「新しい人間を作り出し、新しい社会を生み出す」ために２つのことを準備する。一つは、彼が考えるイギリ

スを危険に晒した種類の人間を殺害することである。もう一つは、「新しい人間」を生み出すことである。

ショトーバー船長の弟子のようなヘクターは、空襲時、雷鳴が轟いているのは、「新しい創造物」が空から来て自分達に取って代わるか、もしくは天空が落ち自分達が破壊されるのであろうと予測する。

> HECTOR: Heaven's threatening growl of disgust at us useless futile creatures.[…] Either out of that darkness some new creation will come to supplant us as we have supplanted the animals, or the heavens will fall in thunder and destroy us. (140)

ヘクターは、"There is no sense in us. We are useless, dangerous, and ought to be abolished" (140)と自分達には良識はなく、役に立たず、危険であるからと自分達の完全なる破壊を求める。

しかしショトーバー船長が殺害計画する種類の人間はランダルやマンガンである。ランダルは上流階級出身で、パブリックスクールと大学を卒業後、外交官として海外で活動していた。しかし彼は、現在は働かず、恋愛対象として見ている義姉を追いかける日々を過ごす。またショトーバー船長は "To kill fellows like Mangan" (86)と言い、女性や子供を低賃金で酷使する産業資本主義者であり、拝金主義者の政治家であるマンガンを殺すために、砂利穴にダイナマイトを用意している。実際、マンガンは空襲時にその穴に隠れ、死んでいる。またマンガンの工場は何を生産しているかは、劇中では言及されていないが、それは軍需工場であると推測できる。マンガンは戦争中のイギリスを救っているのは自分である(145)と断言している。またアリアドニーも植民地総督の夫に"the necessary powers" (145)を与えるようにマンガンに命令する。ショトーバー船長が彼らの死を望むのは、彼らが私利私欲しか考えない故に、彼らが自分達の不幸の原因であると考えるからである。

> CAPTAIN SHOTOVER. What then is to be done? Are we to be kept for ever in the mud by these hogs to whom the universe is nothing but a machine for greasing their bristles and filling their snouts? (86)

ショトーバー船長の考え方は、実際に、第一次世界大戦は資本主義の陰謀であると見做したドイツ人の社会主義者の考え方に類似している。

> German socialists attended, and denounced the war as a capitalist conspiracy, fought for the benefit of arms profiteering and territorial gain. In such an atmosphere it was not surprising that the Russian exile, Lenin failed to convert the delegates to his view that the war was to be welcomed, as a

necessary and inevitable prelude to the fall of capitalism through civil war.[6]

それ故にショトーバー船長は、自分の利益しか考えないマンガンや何もせず放蕩するランダルのような上流階級の生死を司る手段を探し、ダイナマイト開発に試行錯誤する。

CAPTAIN SHOTOVER. We must win powers of life and death over them [Mangan and Randall] both. I refuse to die until I have invented the means. (86)

ショトーバー船長に従えば、「新しい社会」にはそれに不必要な人間の抹殺と、「新しい人間」の誕生が必要である。それ故にショトーバー船長は、エリーが必要なのである。何故なら彼女には彼の革命に必要な 2 つの能力が備わっている。第一に、エリーには出産できる能力がある。彼女には「新しい創造物」を創造する可能性がある。それは座礁しかけるイギリスを救う方法であるとショトーバー船長は考える。またヘイソンによれば、男性は女性の出産能力を羨望する。また男性は危険を冒し、苦痛を伴いながらも、女性と一緒にいようとする。

MRS HUSHABYE: Why do they [men] envy us the pain with which we bring them into the world and make strange and dangers and torments for themselves to be even with us. (90)

ヘクターはこの女性の身体能力を羨望し、 "I can't have a baby" (154) と、自分にその能力がないことに劣等感を感じ、悔しがる。その一方でその能力を有するエリーは、妻のいるヘクターとの子供を諦めなければならないことで "No. You have stolen my babies" (110) とヘイソンを責める。しかしエリーはヘクターとの子供を望む一方で、ショトーバー船長との間には子供を求めない。また彼は 88 歳という高齢故に、エリーとの子供は望めないのである。Tracy C. Davis が "there are no children" と指摘するように、この作品では子供が不在である[7]。ハシャバイ夫妻には娘と息子がいるが、彼らは登場しない。また、Harold E. Pagliaro もショトーバー船長とエリーの結婚には子供を持つことは不可能であることを指摘する。

In giving her "broken heart and strong sound soul to its natural captain, my spiritual husband and second father", she is setting for an affectionate celibacy — the end of

---

[6] Gilbert Martin. *First World War*. (HarperCollins Publishers ,1994) p. 242.

[7] Trancy C., Davis. "Shaw's Interstices of Empire: Decolonizing at Home and Abroad." *The Cambridge Companion to George Bernard Shaw*. Ed. Christopher Innes (Cambridge UP, 2004) p. 227.

> the road for begetting and the end of road for Heartbreak House. Their marriage, such as it is, may be amiable, but it is the grotesque symbol of sexual failure for both of them. The Life Force seems to have abandoned Heartbreak House. [8]

彼らが言及するように、ショトーバー船長とエリーとの間には子供は望めない。

しかしながら、Pagliaro が言及するように、彼らの関係は身体的な繋がりではなく、精神的な繋がりであり、"Platonic"な関係と言える。まさにそのような関係をショトーバー船長と築けるが故に、エリーは彼を結婚相手と決める。彼が自分にはジャマイカのどこかに最初の妻がいると告白する時、ヘクターの真相を知って傷心した彼女がもう一度幸せを感じる。

> CAPTAIN SHOTOVER. [...] And I have a wife somewhere in Jamaica: a black one. My first wife. Unless she's dead.
>
> ELLIE. What a pity! I feel so happy with you. [...] I thought I should never feel happy again. (130)

何故なら彼女は "Heartbreak"仲間を見つけ出し、共感できる相手と出会えたからである。また彼等を精神的に結び付けたのはジャマイカの黒人女性である。ショトーバー船長が彼女について言及しなければ、二人は結ばれていない。

二人の結婚には 2 つの重要な意味がある。第一にエリーとマンガンの子供を阻止することである。 "There is enmity between our seed and their seed" (86) とショトーバー船長が言うように、彼は自分達の種とマンガンのような産業資本主義者である種とを分けている。ショトーバー船長とハシャバイ夫人はマンガンの遺伝子を残すことを阻止して、完全にマンガンの種を撤廃することに成功する。

第二に、革命家のショトーバー船長の意思を継ぎ、彼亡き後に、 "new creation" をこの世に生み出し、「新しい社会」を築くことがエリーに期待されている。またエリーも彼の望みを感じている。二人が結婚を決意した後、彼女は "there is peace for the old and hope for the young"(139) と自分達を表現している。また、空襲にもかかわらず、エリーは興奮し、ベートーベンの音楽のように聞こえる空襲が明日も来ることを望む。それはマンガンが空襲で亡くなったように、自分達とはことなる種が絶滅することを望んでいようである。

「女性の強さ」を悟ったエリーには、自分達の子孫と共に家母長制社会を誕生できる能力がある。ショトーバー船長は、人類の平和のために、産業資本主義者、物質主義者、拝金主義者、帝国主義者を一掃し、新しい人間が作り出す家母長制という「新しい社会」を築くことをエリーに期待する。

---

[8] Harold E., Pagliaro. "Truncated Love in *Candida* and *Heartbreak House*." *Shaw The Annual of Bernard Shaw Studies,* Volume 24 (Penn State UP, 2004) p. 213.

しかしこのようなエリーにも欠点が一つある。それは金銭欲である。それについてショトーバー船長は指摘する。

> CAPTAIN SHOTOVER: […] I see my daughters and their men living foolish lives of romance and sentiment and snobbery. I see you, the younger generation, turning from their romance and sentiment and snobbery to money and comfort and hard common sense. (128)

エリーは父親の所為で貧困生活を強いられ、嫌と言うほど貧困の厳しさを知っている。それ故に金銭と引き換えに、マンガンに若く美しい自分自身を"businesslike"に売ろうとする。また自分の魂を教養高く保つには、金銭が必要であり、貧困は魂を蝕むとエリーは主張する。しかしそのようなエリーをショトーバー船長が、"Riches will damn you ten times deeper" (127)と諭す。何故なら、ショトーバー船長は、エリーが導く彼女の次の世代に、今までの女性たちが犯した過ちを避け、女性の手で築く社会に期待しているからである。しかしValerie A. Murrenus はショトーバー船長は自己中心的で女性の権利のためには戦っていないと主張する。

> Shotover does not champion women's rights or equal gender rights or any rights for that matter because he cannot see beyond himself to do so. In his solipsism Shotover plays an elaborate game of "king of the emotional hill" where he always comes out the victor.[9]

しかしショトーバー船長はイギリスのため同様に、女性の権利のために戦っていると言える。彼は女性の本質を理解し、女性の能力に期待している。何故なら彼は女性の重要性を知っているからである。女性が存在しなければ、国家は存在しないことを彼は知っている。それは彼が育てたヘイソンの言葉から理解できる。 "you governs the country so long as we [women] govern you" (146) とヘイソンは言う。このような言葉は家父長制の家庭からは出てこない。ショトーバー家は、ヴィクトリア朝時代の女性に求められていた社会的役割、男性に依存する「娘、嫁、母」という役割以外に、女性の可能性を見出すために、エリーとマンガンの結婚を阻止する。そしてショトーバー船長が彼女と結婚するのである。

6．おわりに

エリーが家母長制家庭である"Heartbreak House"で「女性が男性よりも優勢な立場であ

---

9 Valerie A., Murrenus. "Hostages of Heartbreak: The Women of *Heartbreak House*." *Shaw The Annual of Bernard Shaw Studies,* Volume 23 (Penn State UP, 2003) p. 19.

る」ということを知り、社会における女性の強さ、重要性を認知することで、将来に希望をもつことを示す。またエリーとショトーバー船長との "Platonic"な関係は、彼らが夫婦関係にあるというよりは寧ろ、第一次世界大戦中で座礁しかけるイギリスを救うために計画された「新しい人間が築く家母長制社会の誕生」という革命の同志関係であると言える。『傷心の家』の最後には希望が残る。それはこの作品が Tragic-comic である所以なのであろう。

また彼等を結び付けたショトーバー船長の最初の妻である黒人女性の影響は多大である。ショトーバー船長を救い、女性を男性に隷属させることなく、その反対に女性を尊敬して、彼女達のためにこまめに動く夫として教育し直した彼女の成果が海を渡り、またショトーバー船長に教育された二人の娘を通し、そして彼とその娘達がエリーに及ぼした影響を通し、イギリスを「家母長制社会」に変革する兆しを見せる。

この作品でショーは、この時代のイギリス社会で一般的に否定的描かれる黒人女性の表象を肯定的な表象へと変えることを試みたと言える。彼は黒人女性がイギリス社会に新しい息吹と強力的な影響を与え、革命を起こす潜在能力を持つ女神のように描く。この作品にはイギリスでの新しい変革への期待が込められている。ブレヒトは"Shaw is a terrorist"と言う[10]。テロリストと呼ばれるショーは、「英国的テーマに関するロシア風幻想劇」というこの劇の副題に、イギリス全体が抱いていた幻想から人々を目覚めさせ、その幻の崩壊により人々を heartbreak させ、「心機一転、新しいイギリスを築く革命」を扇動する意図を込めたように思われる。

---

10 Bernard Shaw. *Heartbreak House*, p. xi.